

## 審査の結果の要旨

論文提出者氏名 角田俊男

角田俊男氏の論文「主権・社交性・判断力——18世紀イギリス連合王国・帝国の情念論」は、近代自然法思想（グロティウス、ホッブズ、プーフENDORフ、など）とシヴィック・ヒューマニズム（マキャヴェリ、ハリントン、ハチソン・フレッチャーら）のヨーロッパ思想史のパラダイムを検討した上で、主権国家の戦争権に対して、社交性によって国際秩序を模索する思想家の系譜を、主にスコットランド、アイルランド、インドの経験を背景に自らの思想を構築してきた思想家や詩人の言説を詳細に検証したもので、特に論文全体の4分の3を占める、ヒュームとバークに関する議論は、これまで国制論からアプローチされることの多いヒュームとたんなる保守主義者としてのみ見られがちなバークの思想を、一新させる業績といえます。また角田氏の研究は、膨大な一次文献のみならず、多くの重要な二次文献を渉猟し近年の研究動向を着実に踏まえたうえで、それらの知見を明快な全体の図式の中に格納して統一的に説明することに成功しています。従来の研究によれば、ロックからハチソン、ヒューム、スミスを経てバークにいたるイギリス思想史は、自然法理論や情念論の継承・転換を背景とした国民国家論のヴァリエーションとして提示されてきましたが、本論文は、イングランド、スコットランド、アイルランド相互の対抗・連帯関係、またイギリス連合王国の帝國的構造や国際関係といった分析視覚を新たに導入することによって、一世紀の長きにわたる諸思想の布置を構造的に捉えなおした、浩瀚で画期的な研究といえます。

審査委員会は角田氏の労作のイギリス思想史への大きな貢献を高く評価し、博士論文としてふさわしいものと判断したが、一方、その構想の壮大さ、新しい学際的なテーマへの果敢なチャレンジに必然的に伴うさまざまな問題点を指摘せざるを得なかった。本論文の一つの重要な問題提起は「主権」概念と「社交性」概念の再検討であるが、そのための方法論・概念規定を扱う章がなく、情念論・人間論から国際関係論までを包括的に取り扱うという野心的な試みを遂行するための妥当性を十分に示すためにも、分析手法についていっそう自覚的・意識的であるべきであったろう。また社交や公共圏についての議論におい

て、ヒュームのコスモポリタニズムやバークの崇高の観念に着目し、この時代に距離の観念が導入されて、水平的な次元における拡大が見られたことを説得力を持って論証したが、たとえば宮廷やサロンなどの社交空間、そこにおける「文明化の過程」を論じなかったのは、ヒュームのフランス君主制論やバークの騎士道論との関係を考えるときに見落とせない問題である。社交圏や公共圏の階層性、それらの変容に着目すれば、この時期の思想の転換がよりいっそう立体的に描かれたと思われる。それはまた社交性が排他性と他律的規律性の両義性を持ち、逆機能するという論的可能性についての分析を可能としたであろう。本論文はイングランドの周縁から発せられた新しい政治思想の枠組みを発見することが主眼であったために、それらの思想が批判、あるいは目標とするイングランド自体の叙述にやや平板さが見られた。またバークの崇高論の解釈については崇高を感じずる主体が誰であるか、という点での誤解があるのではないかという指摘もなされた。最後に、本論文は450ページを超える浩瀚なものであるが、スタイルや文章表現に難解さが見られ、展開の大筋を読者により鮮明に伝えるような叙述の形式をとるべきであった。たとえば議論の枝葉に当たる部分を脚注にまわして処理するなどの方法を考えるべきであった。これらの批判や指摘を踏まえて、今後本論文を出版して欲しいという要望が全委員から出された。

以上の審査結果をふまえ、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものとして認定する。